

## 私は誰？ 生命体から人間へ

この記事はブライアン・スイミー博士へのインタビューを編集したものです。

それでは、特に進化という文脈の中で、人間であることの意味とは何なのでしょうか？

人間の誕生について、最も広まっている説の 1 つは、「時期」と関係しています。例えば、人間は非常にチンパンジーに似ています。驚くことに、99%の遺伝子が同じなのです。チンパンジーと人間より、イースト菌同士の方が、違いがあるのです。それを、どう理解したらいいのでしょうか？

---

チンパンジーと人間より、イースト菌同士の方が、違いがあるのです。

---

ある学説では、発達の度合いを管理する遺伝子に、微妙な突然変異が起きた、とします。人間の発達度が、遅れたというのです。もしサンショウウオの発達度を遅らせたなら、あの初期の、オタマジャクシとして生きている段階のままかもしれませんよね？

でも、哺乳類の発達度を遅らせると、面白いことに、遊び好きな段階に、とどまっていることができるのです。あらゆる哺乳類は、一定期間、遊びます。定まった遺伝的なプログラムがない期間です。だから自由があります。

人間に繁栄をもたらした突然変異において、何がおきたかという学説は、こうです。生物学的に、私達は、あの自由と好奇心の段階にとどまるために、発達を遅らせたのです。それが人間とは何か、ということ、雄弁に物語っているようです。

それが意味するものは、非常に大きい。人間は、本当に深い部分で、何をすべきか、知らないのです。ということは、人間は如何に行動すべきかを、自分達の DNA に頼れないのです。

---

遊びや、好奇心、驚き、恐れ、魅力に、夢中になってしまうような存在を、生命体が誕生させた瞬間があったのです。

---

どう行動すべきか、DNA に教えてもらう代わりに、何が起きたかという、初期の人間達は、身の回りのものに、深く惹きつけられるようになりました。もし烈しい山火事がおきたとしたら、すべての動物は、どうすべきか分かっています。逃げるのです。人間には、新しい可能性があります。山火事に、とても好奇心を惹かれて、逃げるより火に近付いていくことさえ、しかねません。遊びや、好奇心、驚き、畏れ、魅力に、夢中になってしまうような存在を、生命体が誕生させた瞬間があったのです。驚愕するという能力が、すべてをもたらしているのです。

だから人間とは、感情の倍増装置なのです。私達は火や山火事に、わあーっと思う。夕陽や朝焼けでもいい。他の動物にとっては訳が分からないくらい、沈んだ夕陽を長々と思っていられる。死や誕生についても、そうです。宇宙のあらゆる有様が、私達にとっては、驚くべきことなのです。

人間社会は、こうした深い経験を、意識的に共有する手段を發明する、という反応をみせました。その行動方式は、言語です。言語というのは、ある人の内面的な経験を、別の人へと実際に伝える、別の人まで運んでいく手段なのです。そしてこのように言語集団が育ったのですが、その発達は、生命の始まりと同じくらい重要です。なぜなら今や、学習することで、現在進行中の、種の進化の一端を担えるからです。

---

私達は、ある意味では個々の集団です。しかし私達の知性は、人類の 20 万年の経験で創られ支えられているのです。

---

他の種を見てください。彼らは自分の DNA や、生きてきた期間に学んだことに頼っています。しかし人間は、DNA や自己の体験に頼るだけでなく、過去に学ばれた事に、頼ることもできるのです。この能力のおかげで、私達は言語を用いて、実際に学んだことを物理的な形にして、時を越えて存在させることができます。学習したことが、人類社会で永久に所有されることになるのです。

そういう意味では、まさにこの進化の力学のプロセス、変化、そして、今や個人的な経験までも、種を指導する制度の一部となりうるわけです。そう考えてみると、人間は、個人ではないといえます。私達は、ある意味では個々の集団です。しかし私達の知性は、文化として表現された、人類の 20 万年の経験で創られ支えられているのです。

人間は、図書館や、最近のコンピューター・チップに、膨大な量の知識を蓄積してきました。長く時代を超えて、自己の進化上の経験を学び続けることができる

動物が、創り出されたのです。それぞれに、20 万年かかって作られた知性が宿っています。